

# 神社祭祀にみる祈りのかたち

— 越谷のオビシヤ・神饌・祓いの伝統行事を通して —

Research of People's Prayers at Shinto Shrine Festa  
— An investigation of the Divine Service OBISYA and the Offerings,  
SHISHI-MAI, and MUSI-OI of the Kawasaki, Simomakuri Katori,  
and Nyotei Shrines —

佐藤ひろみ\*・中林みどり\*\*

Hiromi SATOH, Midori NAKABAYASHI

キーワード：オビシヤ・的射神事・神饌・祓い・伝統行事

Keyword : Obisya, *Matoi* (Archery) Shinto Ritual, Offering, Ritual, Traditional Event

## 1. はじめに

埼玉県神社庁による「埼玉の神社 北足立・児玉・南埼玉<sup>1)</sup>」には越谷市内 59 社の神社由緒、信仰、組織の変遷や現状についての詳細が記されている。下総国一宮を本社とする香取神社が 15 社、元荒川流域を中心に分布する南埼玉郡に特有の久伊豆神社 12 社が勧請され、元荒川の東側自然堤防上には香取、西側には久伊豆が分布している。また元荒川と古利根川が蛇行して縦貫する低地には稲荷神社が多数鎮座する。さらに市史<sup>2)</sup>にはかつての当地域 51 カ村の鎮守社が信仰により分類されている。

宮田登は日本人の宗教観について、日本人が生活の中で自然発生的にかつ無意識のうちに行っている習俗を通して研究し、広く日本文化の全体像をとらえるという観点から、宗教を日々の生活の中に取り込み受け入れた庶民の精神構造や生活文化に焦点をあてて語っている。そしてさらに神社を中心とした伝統的行事や地域に受け継がれている独特の民俗行事、日々の生活の中での行動などから自然に宗教的意識がつくられ、日本文化の体系の一部を占めていると指摘している。

現在、神社における伝統行事や地域の生活の中で伝え続けられている民俗行事、また神社の参詣や人々の祈願なども、まさにその指摘にあたるものであろう。古くより五穀豊穡や安寧を祈念してきた神事や伝統行事から初詣、七五三祝、安産祈願から受験祈願、厄除け祈願、交通安全祈願など、日々の生活の中での必要に応じた様々な願いが日本人の祈りの生活文化として今に続いている。

一昨年度実施した当研究所共同研究プロジェクト 1 の越谷市における生活意識調査においても、伝統行事に関連する質問で、初詣は大半の人が毎年参拝しており、祈願内容は、家内安全、

\* さとう ひろみ 文教大学人間科学部

\*\* なかばやし みどり 文教大学教育学部

七五三祝、厄除け祈願がいずれも過半数を超え、お宮参り、交通安全祈願も高率が示された。このように当地においては、多くの人が生活の中の必要に応じて、また人生の節目に沿って祈願しているという実態が示されている。

本稿においては前報告の武蔵一宮氷川大社に伝わる伝統行事に引き続き、越谷市の神社に伝わるオビシャ行事や神饌奉斎、獅子舞や虫追いなどの伝統行事の間取り調査を通して祈りのかたちをみることにする。オビシャは五穀豊穡や無病息災を祈念する神事として古来より執り行われているもので、同地域を含む埼玉県東南部に多くが伝承されている。今回調査では第1報として、とくに川崎神社、下間久里香取神社、平方女帝神社における伝統行事を中心に考察する。これらを通して日々の生活の中で受容し継承してきた人々の祈りのかたちの一側面をみるとともに、連続と継承されてきた。神社祭祀や伝統行事に民俗文化的側面から焦点をあてて考察したい。さらに僅かながらでも、古代から今に続く人々の普遍的な神観念や心意について模索することに繋がればと考えている。

## 2. オビシャ（御備社・御歩射）行事とは

オビシャ行事は邪鬼を打祓い、五穀豊穡や無病息災および厄除け等を祈念する祀りである。内容については的射行事や蛇作り、甘酒の振舞いやあられの投げ合い、鮎や鯉などの神饌や独特の神饌の供えなど地域によって様々な行事が組合わされ実施されてきた。かつては蓬萊山<sup>ほうらいざん</sup>と称する特別な縁起物飾りも供えられたという。また「当渡し」と呼ばれる当番の引継ぎ式にあたるものは、現在でもかたちを変えて多くの地域で行われている。いずれも埼玉県東南地域の農村の伝統的な生活と深く結びつき、伝えられてきた伝統行事である。三郷・八潮・吉川・幸手・春日部・越谷市を中心に多くが分布するが、近年は生活の変容による衰退や消滅が危惧されている。オビシャは本来、的射行事ともいわれ、弓矢で的を射ることによって、その年の吉凶や農作物の豊凶を占う祀りである。「御備社」・「御歩射」とも表記される。「ブシャ（歩射）」は流鏑馬の騎射に対するものとされ、京都の上賀茂神社、下賀茂神社を初めとして各地の古社において儀式が盛大に執り行われ、伝承されていることなどは一般によく知られている。また県内ではこのオビシャで行われる歩射を地域によっては弓ぶち・弓射り・弓取り式などとも呼んでいる。越谷市ではオビシャを「祭り」「初午」「祈年祭」と称して実施しているところが多い。これらの行事は、年頭や春先の1月から3月にかけて行われ、的射行事や神饌の奉斎が伝えられているものが多いが、こうした春季のオビシャの他に秋季の「新穀感謝祭」「感謝祭」と呼ばれる収穫祭（新嘗祭）的なオビシャも行われている。

平成6年に埼玉県民俗センターにより編集されたオビシャ行事調査報告書<sup>4)</sup>によれば、埼玉県のオビシャ行事は272件の行事が確認され掲載されている。そのうち大半が分布している県東南地方のオビシャで的射行事を実施している地区は47箇所、蛇作りは12箇所、あられを伴うものは6箇所、蓬萊などの飾り物や古くからの神饌を供えるもの9箇所、当渡しの際の謡は20箇所が確認されている。越谷市におけるオビシャ行事は北川崎や下間久里をはじめとして、的射行事は9(4)箇所（北川崎：川崎神社、下間久里：香取神社、大沢：香取神社、川柳字麦塚、川柳字伊原、大成町、大成後方、花田、東越谷）、蛇作り（水神社：蛇撚り）は1箇所、古くからの神饌奉斎2(2)箇所（女帝神社：娘御膳、川崎神社：餅、甘酒5(3)箇所（弥十郎稲荷・香取神社、花田稲荷神社、東町伊南里神社）、当渡し3箇所（川崎神社、女帝神社：三々九度杯、下間久里香取神社）、あられの投げ合い1箇所（川柳伊原地区）である。しかし現在では先の報告書で危惧されていた通り、その実施数も減少し、さらに簡略化が進んでいる。（ ）内数字が現在実施確認数。

### 3. 川崎神社【オビシャ・虫追い】

#### 神社由緒・位置

当社は北川崎の鎮守として、五穀豊穡の神として、また子供を守護する神として祀られているといわれ、越谷市の北東部に位置し、神社裏手の東端は古利根川に接している。古くは香取神社と称していた。創建についての伝承はないとされるが、埼玉県神社庁の報告によれば、正保年間から元禄8年（1695）に分村した向畑村の香取神社は、古くは川崎村の香取神社と称されていた当社から勧請したものと推測され、元禄期以前にはすでに奉斎されていたものではないかと記されている。北川崎村の鎮守として祀られてきた。明治40年に稲荷神社2社、水神社1社が合祀され川崎神社と改めた。香取本社の御祭神は経津主命（または伊波比主命）である。利根川を挟んで香取本社と対座する鹿島本社の御祭神である建御雷命（武甕槌命）とともに出雲に降臨し、大国主命との国譲り交渉にあたり葦原中国を平定したとされている。経津主命は日本書紀、出雲風土記に登場する。軍神として祀られている。また境内には安産の神、子育ての神として木花之佐久夜毘売を御祭神とする仙元社（浅間社）や成田山、大杉社が勧請されている。浅間社は江戸とともに富士信仰が盛んであった当地に多くが奉祭されている。

北川崎は農村地域に新住民が多く移り住んだ旧住民と新住民が混在した地域で、年々戸数が増加し、当初は30戸～50戸であったが、現在（2011年度）は230戸である。5つの自治会のうち、昔からの旧住民が多い自治会がオビシャ行事を担っている。氏子数は旧住民の50戸でこの中から代表の年番、当番といわれる世話役が決められ、川崎神社の年間行事のすべての運営を総代とともに担っている。

#### オビシャ行事 弓取り（的射）神事・投げ餅・松竹梅・甘酒（甘酒小屋）・申し渡し

平成24年1月8日に執り行われたオビシャは、越谷久伊豆神社の神職による祝詞の奏上、お祓い等の祭典奉仕の後、拝殿前での弓取り（的射）行事となる。的は二重丸の周りに松竹梅と鶴亀が描かれている。かつて弓はにわたこの木で作られ矢はうつぎの木で作られていたというが、現在は越谷の弓道場で使われているものと同じ黒塗りの大振りのもので変わっていた。射手は拝殿前左奥に奉られている浅間社を背にして構え、5～6m離れた距離から拝殿前右側に設置された的を射る。当たればその年は豊作となるという。農作物の豊凶と年の吉凶を占う行事である。神主、氏子総代を初め、新旧の年番の氏子数人が的をめがけ五穀豊穡と無病息災を願ひ矢を射る弓取りの行事（的射神事）が執り行われた。（写真1、2）この的射神事の終了後は境内の集会所へ移動して新年会が開始された。これはかつての直会が簡略化されたもので、今は新年会と呼ばれている。直会のお膳は、かつては卯の花、ねぎぬた、こんにゃくのさしみ、芋煮、赤飯などであったといわれるが、5、6年前を最後に現在は簡略化が進み行われていない。また土産として煮干し（尾頭付き）、昆布（竹を意味する）、鯛いか（松を意味する）、うめ（梅の意味）が「礼酒の肴」として和紙に包んで持ち帰ることとなっていたというが、これも同様に途絶えていた。現在は神前に二重ねの鏡餅が神饌として御神酒と共に供えられ、撤饌の後は細かく割られて氏子に分けられるという。当社特有の餅撒きも今は行われていない。新年会（旧直会）が終了する昼過ぎには再び神社拝殿に戻り、拝殿内でオビシャ当番の「申し渡し」といわれる引継ぎ式となる。かつては氏子総代と新旧の当番の3人が本殿を前に正座し、当番の前にはご神体が置かれ、御神酒を酌み交わし宮形の厨子が渡されるという引継ぎの儀式が執り行われていたという。さらに三升の御神酒が振る舞われ、そうした中で謡が盛んに謡われていたとのことである。当渡しの際の謡については、後述する下間久里香取神社においても同様で、70代以上の氏子の記憶に留めているに過ぎない。当社氏子総代の坂巻氏によれば、6年前を最後に伝えられていた行事のほ

とんどが簡略化され、現在では以前に較べてすべてにおいてかなり形式的になっているという。また昨年の3.11における東日本大震災では御水舎が崩れ、拝殿もいくらか被害を受けたとのことであった。今年のおビシヤの祭典には既に拝殿の修復がなされていた。

次に、当社で同様に豊穡を祈る民俗行事として伝えられている、「虫追い」を祓いの行事のひとつとして捉え述べることにする。

#### 虫追い行事 豊穡への祈りと祓いの行事 耕地及び耕地境の祓い清め

虫追い行事は、田畑の害虫を祓い、豊穡を願い耕地を祓清める農耕儀礼である。江戸時代に始まったとの記録が西方村（現相模町）の旧記に見られる。寛政3年の夏は天候不順により沢山の虫が稲についたため、麦藁で作った松明を燃やしながらか、耕地を廻ってあるいたところ、その年は豊作になったとされる。以来、虫追い行事は毎年7月24日に行われるようになったという。かつては多くの地区で行われていたと言うが、現在この行事は越谷では北川崎地区のみに残されており、県の無形民俗文化財に指定されている。

平成23年に行われた当行事は、大震災の影響を受けたものの氏子や自治会の努力で決行された。午後3時過ぎより前もって準備されていた2～3m程の麦藁の大松明が100本ほど神社境内の鳥居や集会所前に立て掛けられた。氏子総代が神前に御神酒、灯明をあげ、青笹竹の先端に御札を挟んだ幣束（田畑の字境に打ち立てる）が奉られた拝殿で氏子総代、各自治会の代表、年番に御神酒が振る舞われた。日が暮れると、川崎神社総代の挨拶の後、神社を出発して田畑の手前で御神灯から麦藁の松明に火が灯される。次々に松明に火が灯され、太鼓と鉦の拍子に合わせて「稲の虫ホーイ、ホーイ」と声をかけながら耕地を練り歩く。最初は住宅地を抜けるが、暗くなる頃、田畑の農道を大松明の長蛇の列が練り歩く様子は壮観。氏子総代が耕地の字境に青笹竹の先に御札を挟んだ幣束を立てて行く。境の祓いである。

## 4. 女帝神社【おビシヤ（御備射）・特殊神饌「娘御膳」・当渡し「三々九度杯」】

### 神社由緒・位置

当社の由緒は、平成5年に拝殿前に建てられた口碑の女帝神社由来記（当地の古老による伝承）に詳しい。子孫繁栄を願い安産祈願をする婦人たちの信仰が厚かったとされる。古くから平方村南の里鎮守として祀られてきた神社で、伊奘冉尊と神功皇后いさなのみこと じんぐうの二柱を祭神としている。当社はこの他に八坂神社を勧請し奉祭している。口碑によれば、女帝社が位置する平方は、中川と会の川に挟まれた地域で、かつては島のように見えたためか平方島と呼ばれていたという。「埼玉の神社」(埼玉県神社庁編)によれば、当時から平方村は戸数185とかなり大きな村であったため村組ごとに鎮守を祀っていたという。女帝神社は平方村の南組、横手組で祀られていた。明治45年に浅間神社に合祀され、昭和8年に復帰してから後は、氏子は南組の29戸でいずれも旧家である。江戸時代に名主を務めた白鳥鴻一家は現当主で19代目という旧家で、先祖は大坂夏の陣に敗れて当地に落ち帰農したと伝えている。23年度は氏子総代の白鳥俊一氏が本当番であった。神社の当番は後当番、本当番、前当番があり、3年間にわたって年行事を担うとされ、この総代を中心に氏子代表の前当番の関根豊氏と後当番の飯山年夫氏から、インタビューに快く応じて頂くことが出来た。以下の話はその際の口述メモより抜粋した。

当地の氏子の生活や健康は、他の地に較べると豊かであったが、明治45年の合祀政策によって村社の浅間神社に合祀されることとなった。ところが合祀の後、氏子の間には夭折する婦人や経済的にも悲運に見舞われる家が多くなり、その後、浅間神社も火災を起こして全焼、当社のご神体も台座だけが残るといった状況であった。そこで、氏子一同が協議の末、白鳥家の杉林や芋

畑であった旧社地に仮の社を造って、浅間神社から焼け残ったご神体の台座を奉遷、神社は再建されて氏子の生活も合祀前の状態に戻ったという。また関根氏は祖母から次のような話を聴かされていたということである。昔は出産は命がけのことで、とくに地元に産婆がいなかったため、出産は大変難儀であったが、「女帝様（によていさま）が守ってくれるので、お産で亡くなった人はいない」といわれて来たそうである。ところが浅間神社へ合祀されている間は、当地域で夭折する婦人が多くなり、経済的にも困る家が多くなったということであった。氏は続けて、祖母の伝えから、かつて当地域は他所に較べると男の人を大切にす傾向にあり、食事の場所も男の人とは別の場所で飲食するなど男尊女卑の傾向が強く、そのことによる女の人や嫁の扱いにも厳しいものがあつたのではないかと祖母から聴いていたという。またかつては備射田<sup>びしゃだ</sup>でとれた米を「御備射」の費用に充てていたが、都市化による水の汚染が進んだため昭和45年ころ取り止めとなったとのことである。さらに当神社への道順を尋ねた際に出会った70過ぎの高齢の婦人達から、昔から親しんで呼んでいたと思える口調で「によていさま」（女帝様）という言葉が何度も飛び出し、古くから当地の婦人達に安産祈願の神として親しまれていた様子が覗えた。

オビシャ（御備射）特殊神饌「娘飾り（娘御膳）」・当渡し「三々九度杯」

女帝神社の御備射は「娘飾り」といわれる特殊神饌（氏子の中には御神体という人もいる）を祭壇の前に奉り、盛大に直会の宴会をする。最後には「当渡し」といって、本当番と前当番が特殊神饌（御神体）を囲んでの三々九度の杯を交わす引継ぎの儀式を行う。（写真3、4）

オビシャの本殿での祭典は午前10時30分より春日部八幡神社の神主による祝詞の奏上、お祓い等の祭典奉仕がなされ、拜殿前には当社の氏子全員が立ち並び神事が行われた。本殿神前には御神酒と二重ねの餅の他、当地で採れた白菜・大根・葱が並び、清酒と共に神饌として供えられていた。祭典後、拜殿右側の当社集会所へ氏子全員が移動し直会が行われた。集会所内の座敷正面には紫の幕が張られ、神主を中に前当番、本当番が座し、正面右側には祭壇が設けられていた。こちらにも神前と同じように二重ねの餅と御神酒が供えられ、後方には木製の男根が飾られ、紅白の水引で束ねた牛蒡と人参<sup>すゐめ</sup>などの神饌が両脇手前に並び、さらにその前に麴箱に入った特殊神饌「娘飾り（娘御膳）」が供えられていた。この独特な神饌は子孫繁栄を願うものであるとされる。

直会の宴会はこうした祭壇の前で歓談し、カラオケを楽しみ、最後に「当渡し」という、本当番と前当番が杯を交わして終了する。その際には予め、明の方（恵方）を磁石で正確に測り、娘飾りをその方角に基づいて正確に置き、厳粛<sup>さんさんくどのさかずき</sup>に三々九度杯で引継ぎの儀式が執り行われた。平成24年の本当番は前年の前当番の関根氏が務めることになる。本来は本当番と前当番の二組の夫婦が娘飾りを中央に置きその両側に向かい合って座り、三々九度杯を交わしたというが、今回は男性が二人ずつ向かい合い執り行われた。その後、今年の本当番によって氏子全員に御神酒が注がれた後、氏子全員の手締めで終了となった。

関根氏の説明によれば、かつての直会の御膳の料理は「きんぴら・こんにゃく・葱ごった・酢蛸・ほうれん草のお浸し・昆布巻き・芋の煮ころがし」などであったという。昭和30年代頃までは当番の大きな家が宿になり料理が作られていたが、最近は仕出し弁当に切り替わり、宴会用の大きな仕出し弁当にお赤飯の折箱が付き、メロン・葛餅・酒が氏子から持ち寄られたものとして別に用意されていた。今年の本当番によりお土産として氏子全員に餅や八朔、蜜柑、林檎などの果物が配られた。

特殊神饌「娘飾り（娘御膳）」子孫繁栄と豊穰の祈り（写真5）

「娘飾り（娘御膳）」と称する特殊神饌は、大根と人参の紅白の千切りなますを敷き詰めた麴箱の中に、二股大根で作った女体と男根、牛蒡・蒨・竹で作った鶴亀、大根の台の上に松・竹・梅の小

枝を挿して作った松竹梅などを回りに飾りつけたものである。かつてはいずれも氏子の家で採れたもので作っていたという。しかし神饌の材料である二股大根や大浦牛蒡などの入手が難しくなったため、数年前に仕方なく飾りの松竹梅の他はすべてを樹脂製に切り替えたということであった。

樹脂製にするにあたり、浅草の業者まで依頼に出向いたという中村氏よれば、できる限り以前の実物に近いものとなるように詳しく説明をして作ってもらったということであった。また鶴・亀の胴体部分に使われていた大振りの大浦牛蒡は千葉の成田山で神饌として供えられる牛蒡と同じ種類のものであるという。また鶴の首は落の根、足は篠竹が使われ、鶴の足と似せるように足の関節の向きに篠竹の節を合わせるように細かく注文したと言ひ、さらに亀の頭部と手足は落の臺で作られていたとの説明がなされたが、樹脂製の神饌とは思えないほど実物に近いものであった。出来得る限り正確に伝え、保存したいという思いが伝わる説明がなされた。(前氏子代表 中村信義氏談)

総代の白鳥氏によれば、「娘飾り」は風紀上好ましくないという理由で一時中止した時期があったが、戦後になって氏子の中から復活しようということになり、子孫繁栄を願って毎年作り続けられ、以来欠かさず奉納しているという。

## 5. 下間久里香取神社【御歩射・神饌<sup>ほうらいさん</sup>「蓬萊山」の飾り物・「オオバン」・獅子舞「辻斬り」】

### 神社由緒・位置

当社は県指定無形民俗文化財の「下間久里の獅子舞」でよく知られている。創建は郡村誌より1697年勧請とされる。御祭神は経津主命<sup>ふつぬし</sup>。境内には他に三峰、稻荷2社、天神、庖廋神を勧請している。中央を南北に通る日光街道に沿った地域の北端に位置し、間久里の地名は古くは「蒔里」とも書かれたという。下間久里の旧家を中心とした60戸を超える氏子により伝えられている。御歩射(オブシャ)行事「祈年祭」と呼ばれる当社のオビシャ「御歩射」は2月11日10時から大相模日枝神社神主による祝詞の奏上で始まり、祭典は21人の氏子代表と共に拝殿内で厳粛に執り行われた。拝殿で御神酒と赤飯が振る舞われ、神主を囲んで当社の由緒説明を聞きながら神前で共食する。(写真6) 続いて弓射で吉凶を占う「まとい打ち」が行われた。的には鶴亀と松竹梅が描かれており、拝殿の前から4、5m先の鳥居に吊るされた的を射る。的のどこにあたっても縁起がよいとされ、氏子総代、自治会長が矢を放ち吉凶を占った。(写真7) 氏子有志がそれに続く。かつては当番が甘酒を作って供え、平成5年までは祭典の後に「オオバン」という独自の行事があったと言う。オオバンとはこの行事に使う銅鍋の名称に由来するもので、濃い甘酒を満した鍋に粃を取った稲穂を束にしたものを2本浸して早稲と晩稲の豊凶を占ひ、豊作を祈願するものである。また神饌飾りの「蓬萊山」がかつては盛大に作られ飾られていたが、これも現在では途絶えている。作り方を記録した写真はファイルにまとめられ、行事の詳細についても伝えられていた。これらの行事については、県教育委員会による調査報告<sup>2)</sup>に掲載がある。また「当渡し」では謡が盛んに謡われたというが、これも今では途絶えてしまっていたが、高砂や四海波、松竹梅などの墨書きの譜は大切に保存されていた。御歩射の「まとい打ち」の行事は、当番によって青竹製の弓矢と縁起物の絵(鶴亀と松竹梅)が描かれた的が用意され実施された。(写真8) 的の鶴亀の原画も保存されており古風な趣が珍しい。

次にオビシャと同様に五穀豊穡と悪疫退散を祈る獅子舞と、地域の境で最後に執り行われる「辻斬り」について次に述べる。豊穡の祈念と悪疫祓いの行事である。

### 獅子舞「辻斬り」 豊穡と悪疫祓いの行事

下間久里の獅子舞は、太夫獅子、中獅子、女獅子の3頭1組で舞うもので、江戸時代初期から

行われ、昭和54年に、県の無形文化財に指定された。京都から旅芸人が来てこの地に伝えたと  
いわれ、「あめがした雨下無双角兵衛獅子」と言われる古風で勇壮な獅子舞である。春日部市（銚子口）、  
千葉県野田市（清水）などに伝わる獅子舞は、いずれもこの下間久里の獅子舞から伝わったとさ  
れる。獅子の装束は揃いの着物に袴、顔の下から胸までを「こうがけ」で覆い、太鼓を腹につ  
けて笛に合わせて勇壮に舞うものである。23年7月15日に行われたこの行事は、朝10時に下  
間久里の香取神社で獅子舞が奉納された。神社拝殿で笛の演奏を行った後、鳥居の外に出て、御  
幣を持った太夫を先頭に、刀を持った副太夫、笛、花笠、獅子が続き、宮参りとなる。社殿で  
舞ったあとは、家内安全、五穀豊穡を祈り、笛の音に合わせて舞いながら、獅子が町内の家々を  
回り、家内安全・無病息災を祈りながら、各戸の座敷に土足のまま上がって舞う。座敷に上がる  
と最初に白幣を持った太夫が神棚に参り、家の主人と家族を白幣で祓い、獅子は草履のまま上が  
り、「地固め」を舞ってその家の豊穡と悪疫退散を祈る。本間氏宅の座敷で経験した太夫の祓い  
と目前での獅子舞は見事で壮観。当地の氏子の自慢とされることが頷ける。さらに獅子連の行列  
は町内に祀られているお堂や小さな社に立ち寄り、丁寧に舞を奉納する。「津島」「はや」「よつあ  
げ」「ぼっこみ」などから舞われる。太夫を先頭に獅子・笛吹き・連中など総勢40から50人。3  
人一組の舞手が10戸ずつを交代で舞祓う。夜の10時過ぎにすべて（100戸ほど）の氏子の家々  
を廻り終え、下間久里と大里の境（辻）で、獅子舞と剣舞「辻斬りの舞」が行われた。太夫が右  
手に刀、左手に御幣を持って「辻切り」をする。（写真9）辻斬りの舞は、獅子舞とともに悪霊  
を切り払い五穀豊穡、悪疫退散を祈る舞である。これは地区内を回って追い詰めた一切の邪鬼や  
悪疫をここでさらに追い出す、祓いの行事である。辻斬りの剣舞を舞う26代目太夫（高橋仲次  
氏）によれば、辻斬りは神事であるので、この行事が終わるまでは潔斎をして身を清め執り行っ  
ているという。神前の祭典における真摯な様子が印象的であった。

## 6. 越ヶ谷久伊豆神社・大沢香取神社・五社稲荷神社・伊南理神社・石神井神社・日枝神社

次にここでは氏子や神職から聴き取った話を中心に各神社の伝統行事を概観する。紙数の関係  
で詳細については次報で述べる。

越ヶ谷久伊豆神社（お燎祭「神楽」出雲の神迎え・新嘗祭神饌・大絵馬 天岩戸開き）

当社では昨年は11月24日に出雲から帰ってくる神々を迎える祭の行事が執り行われた。境内では神迎えの篝火  
が焚かれ、神楽殿では巫女舞や八雲神詠、大蛇退治など出雲神話の演目を中心に神楽が奉納された。翌日は新穀感  
謝祭が行われ主祭神の大国主命や境内に勧請された神々に御神酒等の神饌が供えられた。平田篤胤による天岩戸の  
大絵馬の奉納や、伊勢神宮の遷宮の際の南御門の拝領による大鳥居の建造、吾妻鏡にみえる大河戸御厨のことなど  
神宮や出雲大社とのかかわりが濃い神社である。また24年は厳肅な神輿渡御が執り行われる年であるという。（当  
社禰宜 二瓶氏談）大沢香取神社（オビシヤ 射と神楽の奉納による豊穡の祈り）ここでのオビシヤ「お備社」  
は祈年祭（2月11日）と呼ばれ、7歳になった男子4、5名が射手となり、竹の弓矢で的を射る射の神事があつ  
たが、昭和19年で途絶え、現在は神主と氏子により執り行われている。23年のオビシヤ的射行事は朝からの雪  
の中、当社神楽殿前で実施された。古くからの神楽奉納は当社神楽殿において天孫降臨や稲荷に関連するものなど  
が神明神楽により終日奉納されていた。（写真10）また当地の紺屋の作業風景が刻まれた神殿は文化財である。五  
社稲荷神社（出津のオビシヤ・新穀感謝祭・神饌・大絵馬 伊勢太々神楽）幣殿の社号額に保食命・大己貴命・倉  
稲魂命・太田尊・大宮實命・稲荷社の五柱の神が彫られていることから五社稲荷と称されるという。オビシヤは  
氏子総代、自治会長、各村組の氏子代表が参列して祭典を執り行った後、集会所で直会を行う。県神社庁によれば  
当地区の人口の増加により、氏子の生活や地区内の環境は大きく変化し、古くから続いていた伝統行事が衰退し、  
消滅してきたという。中でも堤根では、春祈祷の獅子の村回り、夏祈祷の辻舞（耕地境で行われる道切りの獅子  
舞）が供えられている。文教大学の開校も当地区の生活環境を大きく変えた要因となったと伺う。（各地区氏子代  
表談）伊南理神社（新穀感謝祭 甘酒の振舞いによる豊穡への祈り）1月12日が甘酒祭りで当番の人が作って供

えていた。昔は四斗樽の酒樽に沢山作って振る舞ったが、今は店から買っている。昔は鍋やヤカンを持って皆がもらいに行った。子供たちも大人に交じって楽しみにしていた。赤飯も作って供えていた。農家の人が多かったので大根の胡麻和えも伊南利様にあげていた。大根の胡麻和えはだいこんとコンニャクを蒸かしてゴマであえたもの。お酒も沢山奉納された。今はサイジンサマ（久伊豆神社の呼称）から神主さんと呼んで祝詞をあげているけど、昔は青柳の青木さんが祝詞をあげていた。普通の家の人が神主の資格を持っている人で、頼まれて各地域を廻って祝詞を奉斎していた。（立沢ヒサさん談） 石神井神社（おしゃもじさま）昔はおしゃもじさまのおしゃもじで背中をさすると咳が止まり病気が治るといわれていた。神社境内左側後方にあるおしゃもじさまの社の前には、以前はうず高く山のようにおしゃもじが積まれたものであるという。神社からは1つのおしゃもじを頂いて帰り、病気が治るとそれを2つ神社へ返した。当時は病気が治った多くの人達からあげられていたという。おしゃもじさまを祀る祠には、入りきれないほど多くのおしゃもじが返され、祠の前には山のように積み上げられたという。戦後、結核のストレプトマイシンができてからは、その数も減り、現在に至っているという。現在でも1月には氏子を中心におしゃもじが配られており、申し込めば誰にでも配られるという。神饌は米、酒、野菜の他にかつては甘酒が振る舞われた。（氏子総代長の新井氏談より） 大相模日枝神社「山王様」と呼ばれ親しまれている旧街道沿いに鎮座する当社の境内は、旧西方村の東外れに位置し、その裏手には元荒川が流れている。この元荒川の土手沿いには見田方の八坂社、東方の久伊豆社、西方の当社の三社が等間隔に並んでおり、その真ん中の久伊豆社が大相模郷の総鎮守になったと伝えられている。官司の秋山幸一氏は市内神社の多くの神主を兼任し、古くは代々名主として当地を統括し現在に至るまで活躍している。神社に関することのみならず越谷の歴史的なことの多くを掌握されている。大相模八坂神社当社は京都の八坂神社（御祭神は牛頭天皇）から疫病神として勧請されたものである。この地域の人はキュウリを1年中食べない人もいる。キュウリの切り口が、京都の八坂神社の御神紋と似ているため、1月～7月の第2日曜日の御神輿が引き込ままでは食べない。食べてはいけないといわれている。姑に話を聞き、その通りにして守っている。翌日からは食べてもよいといわれている。とくに後とりとなる長男は食べてはいけないとされていて、農家の家のみに今でも伝えられ、守られている。但し、分家は食べてもよいといわれている。（氏子総代夫人 谷塚鏡子さん談より）

以上、本稿で報告できなかつた各社に関連する伝統行事の詳細や、2010年から2012年1月までに撮影した伝統行事とそれを伝える人々の多くの写真と考察については第2稿に譲る。本稿掲載の写真はその中の一部分である。

## 7. おわりに

越谷の神社と氏子により連綿と伝承されたオビシヤや、祓いと祈りの伝統行事を通して、古くから日々の生活の中で受容されてきた人々の祈りの一側面に触れることが出来た。川崎神社、下間久里香取神社、女帝神社、久伊豆神社等々の主祭神である記紀の神々に、あるいはその時代の生活の中で必要に応じて勧請し奉斎されてきた社の神々に、これらの神事や伝統行事は、ひたすら豊穰と悪疫の祓いを願い、伝え続けられて来た当地の人々の祈りのかたちであるとは言えないだろうか。

越谷市は元荒川や古利根川が時代により流路を変えて流れる低湿地帯に位置しており、県内でも他地域に較べ多湿である。農業地帯である一方、疫病や伝染病が多発、病虫害の発生も多い地域であったことが市史に記されている。このような環境の当地において農作物の豊凶占いや悪疫の祓いは、古くは生活の中で自然に芽生え、必然とされた重要な行事であったと思われる。人々がその時代の暮らしの中で求め、必要に応じて勧請した神々に、生活の必要に応じた願いを祈念してきた。「射的」により年の吉凶を予見し、農作物の豊凶を占い、邪鬼や悪疫を祓い、特殊神饌である「娘飾り（娘御膳）」や今は途絶えてしまったが、古くは「蓬萊山<sup>ほうらいさん</sup>」と呼ばれる独特の飾り物（神饌）を祭壇に供えて五穀豊穰や子孫繁栄を祈念して来た。「神楽舞」を奉納し記紀の神々に豊穰を願い、「獅子舞」で各戸の家々の邪気や悪疫を祓い家内安全を祈願する。さらに「辻斬り」の剣舞で地区から一切の邪鬼悪疫を追い祓う。また「虫追い」の大松明によって耕地



の病虫害や悪疫を祓い、耕地の字境に御札を立て祓いと豊穰を祈念する等、かつては多くの地区において盛んに執り行われていたという。

要するに、当地において農作物の豊凶は生死に関わる重要なものであった。疫病もそうである。五穀豊穰を願い、悪疫を祓うことは必然かつ重要な祈りであった。神々と共食し饗宴を楽しむ直会は、社を守り地域の絆を深める上でも必要な場であり続けた。厳粛な当渡しの引継ぎ式も儀式の伝承とともに地域のコミュニケーションに欠かせなかった。しかし現在においては農村地域の急速な都市化を遂げた中での継続維持の難しさが問われている。地域環境や生活の変容に伴うこれらの民俗行事の変容や衰退は以前にもまして一層危ぶまれる状況にある。詳細内容の継承保存のための手立てが緊急に必要とされる。氏子による行事の保存ファイルは行事を滞りなく執り行う目的のみならず、保存され貴重な記録として受け継がれて行くことが大切である。的射神事的的原画や墨書きされた謡の譜、神饌の作成手順のメモや写真が大切である。それらを大事に保管し伝える人々の意識と努力が大切であると思われる。

市教育委員会による調査報告<sup>4)</sup>で指摘されたように、伝統文化として、民俗行事の保存伝承のための調査が、ますます緊要であることを痛感する。また今回は当地に伝わる行事をみることにより、古来より日々の生活の中で、記紀の神々に連綿と祈り続けてきた日本人の祈りのかたちの一側面に触れることが出来たと言えよう。今後はさらにこうした伝統行事を調査し、データを積み重ねることによって、日本人の普遍的な神観念や心意を多くの具体例で知り、祈りの姿を知る手掛かりとなればと考えている。

〔謝辞〕 本稿調査の聴き取り調査にご協力頂いたご神職の秋山幸一氏、高梨桂樹氏、松島寿人氏に深謝いたします。また氏子総代の白鳥俊一氏、高橋重雄氏、坂巻克己氏、代表の関根豊氏、遠藤勇一氏、関根弘氏、高橋政昭氏、平人司氏、高橋久志氏、さらに地元の本間成子氏、谷塚鏡子氏、立沢ヒサ氏の皆様には貴重なお時間をお割き頂き、多くの情報を頂戴いたしましたことを合わせて感謝申し上げます。最後に民俗学研究者・斎藤修平先生にはお忙しい中、ご指導を賜りましたこと深謝いたします。

#### 参考文献

- 1) 埼玉県神社庁、「埼玉の神社 北足立 児玉 南埼玉編」(1998)
- 2) 越谷市教育委員会市史編纂室、「越谷市史一」(1974)
- 3) 佐藤ひろみ、「神社祭祀にみる祈りのかたち:武蔵一宮大湯祭神事と神饌から」生活科学研究第32集 pp.169-181 (2009)
- 4) 埼玉県民俗文化センター、埼玉県教育委員会、「埼玉のオビシヤ行事調査事業報告書 埼玉のオビシヤ行事」(1994)
- 5) 越谷市教育委員会、「越谷風土記」(2002)
- 6) 久伊豆神社奉仕会、「越谷の神社」(2002)
- 7) 埼玉県県民部県史編纂室、「新編埼玉県史 民俗1」(1988)
- 8) 埼玉県、「埼玉のまつり」(1989)
- 9) 松本玄智江・山下一也「神道辞典」筑摩書房 (2005)
- 10) 宮田 登、「日本を語る6 カミとホトケのあいだ」吉川弘文館 (2005)
- 11) 三宅和朗、「古代の王権祭祀と自然」吉川弘文館 (2008)
- 12) 大和岩雄、「神社と古代民間祭祀」白水社 (2009)
- 13) 谷川健一、「谷川健一全集 第二巻 大嘗祭の成立 日本の神々」富山房インターナショナル (2008)
- 14) 柳田国男、「柳田国男全集第14巻 神道と民俗学」筑摩書房 (1998)

写真 1



写真 2



写真 3



写真 4



写真 5



写真 6



写真 7



写真 8



写真 9



写真 10



写真 1 川崎神社オビシャ 的射神事  
 写真 3 女帝神社の直会：垂幕右側に祭壇を奉り  
 写真 5 女帝神社 特殊神饌の「娘飾り（娘御膳）」  
 写真 7 下間久里香取神社 御歩射（弓射り）  
 写真 9 辻斬り：下間久里南境の道辻で獅子舞後剣舞  
 で悪疫を防ぎ追い祓う

写真 2 川崎神社 拝殿前 氏子総代による的射  
 写真 4 平方女帝神社「当渡し」特殊神饌「娘飾り（娘御膳）」  
 を囲み三々九度杯で厳肅な引継ぎ式  
 写真 6 下間久里香取神社 拝殿における御歩射の祭典  
 写真 8 鳥居に吊られた弓射りの的：鶴亀と松竹梅  
 写真 10 大沢香取神社 オビシャの神楽「天孫降臨」相生の舞